

絵本テキスト・私見

鈴木出版編集長 波賀 稔

世の中には実に多種多様な「絵本」があります。「認識絵本（ものの絵本）」「知識絵本」「科学絵本」「生活絵本（しつけ絵本）」「物語絵本（おはなし絵本）」「ナンセンス絵本」「詩の絵本」……など、内容によって分類されたり、読者の対象年齢によって「赤ちゃん絵本」「幼児絵本」「大人向け絵本」などと呼ばれたり、様式や画材によって「仕掛け絵本」「写真絵本」「文字なし絵本」などと称されたりします。

いろいろな絵本があることはいいのですが、絵本の編集者としては、自分なりに「絵本」をきちんととらえていないと、絵本としてふさわしいか否かという判断ができません。新しく刊行された絵本を見ると、これも絵本なんだと目から鱗ということもありますが、現時点での私自身が考える「絵本」を整理したいと思います。

1. 絵本とは何か

絵本の定義が曖昧なのは、絵本というものがかなり緩や

かな広がりを持っているということで、決して悪いことではないと思います。しかし、絵本を編集する、絵本テキストを書くといったとき、その目的である「絵本」が曖昧であると、結局曖昧なものしか仕上がりません。

そこで、まず、私自身にとっての「絵本とは何か」ということで、話を進めたいと思います。ここでいう絵本は、「物語絵本（おはなし絵本）」です。

『児童文学事典』（日本児童文学学会編 東京書籍 一九八八年）の「絵本」の項目には、「子どもに向けて、絵を伝達の主力手段とした本。絵のみによる絵本もあるが、絵と文字（ことば）で構成されるのが一般的姿。その場合絵と文字（ことば）が阿吽の呼吸で結合・統合しているのが理想。絵が文の単なる装飾に過ぎないのは拙。」とあります。さらに、「基本としては、ことばと絵（イラストレーション）と物語性とブックメイキングの問題がすべての絵本にかかわる最重要要素である。」と述べられています。

この「絵と文字が阿吽の呼吸で結合・統合」というのが、